

IIAS NEWSLETTER

International Institute for Advanced Studies

August 2009

67

 財団法人
国際高等研究所

<http://www.ias.or.jp>

INDEX

報告	研究活動報告(6月1日～7月31日)
巻頭言	近代世界システムのゆくえ ～副所長就任にあたって
報告	第65回理事会・第58回評議員会開催(6月16日)
紹介	高等研プロジェクト紹介(2件)
紹介	高等研フェロー事業活動の紹介 ①
参加者募集	高等研公開講演会「ここをつなぐコミュニケーション～ことばと表情の認知科学～」(10月24日)
紹介	高等研報告書 0803 「思考の脳内メカニズム」を刊行
紹介	2009年度招へい研究者 (IIAS Researcher)
報告	施設見学・来訪者記録
IIASカレンダー	●研究活動(8月1日～10月31日) ●公開講演会の開催
お知らせ	●修景池にハスの花 ●事務局の組織変更

報告 研究活動報告(6月1日～7月31日)

研究プロジェクト

研究プロジェクトのタイトル	開催日	研究代表者	参加者数
天地人—三才の世界:宇宙・地球と人間の関わり合いの新しいリテラシーの創造	6月2日(火)～3日(水)	尾池 和夫	20
すきまの組織化	6月6日(土)～7日(日)	鳥海 光弘	4
文化財保全技術	6月11日(木)	志水 隆一	4
諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理科学への展開	6月12日(金)～13日(土)	高橋陽一郎	10
細胞履歴に基づく植物の形態形成	6月13日(土)	鎌田 博	12
ナノ物質量子相の科学	6月19日(金)～20日(土)	金森順次郎	38
生物進化の持続性と転移	6月19日(金)～20日(土)	津田 一郎	17
フェロー研究会「京大地球物理学研究の百年」	6月27日(土)	竹本 修三	39
ものづくりにおける実践知を体得した人材の育成と継承に関する調査研究	6月30日(火)～7月1日(水)	岩田 一明	7
21世紀における文化としての設計科学と生産科学	7月1日(水)	岩田 一明	10
フェロー研究会「Copymart as a Near-Future Model」	7月7日(火)	北川善太郎	15
18世紀における世界観の多角的交錯	7月17日(金)～18日(土)	石川 文康	11
宇宙における生命の総合的考察とその研究戦略	7月17日(金)～19日(日)	海部 宣男	19
メタマテリアルの開発と応用	7月24日(金)～25日(土)	石原 照也	48



国際高等研究所 副所長

川北 稔

かつて数年間、歴史哲学の再興をめざすテーマでフェローとして研究をさせていただいて以来、本研究所の活動には関心をもってまいりました。来るべき時代のありようを見すえ、学の新領域開拓の萌芽の発見につとめたいという研究所の趣旨には、共鳴することが多かったからですが、今回、副所長就任にあたって、あらためてその思いを強くしています。

「世界はひとつ」といえば、手垢のつきすぎた常套句となっていますが、それが何を意味するかについて、あまり真剣には考慮しないのが、普通のこととなっています。しかし、コロンブスやバスコ・ダ・ガマの航海以来、西ヨーロッパを中核として拡大・成長を遂げてきた私たちの「近代世界」は、いまや地球全体を覆ってしまい、たったひとつの「世界」が「地球」と同義となりました。この「近代世界」は、「成長」・「拡大」・「進歩」をほとんど病といえるほど至上命題としており、私はこれを、「成長パラノイア」とよんでいます。しかし、いまでは、この「地球」=「世界」は、資源・環境問題という壁に突きあたって、成長の限界を経験しています。これまで経験された同種の危機と同じように、この限界も、いわば「近代世界」に特有の「宗教」である「科学技術」によって解決されるのでしょうか。

たとえば、16世紀に、木炭による製鉄業が展開して森林を食い尽くし、生態学的な危機を経験したイギリスが、18世紀になってコークスによる製鉄の技術を開発してこれを克服したことは、「産業革命」として知られています。しかし、その石炭による製鉄業が、環境破壊をもたらしたことも事実です。当面の問題を解決しようとする技術革新は、別の問題を引き起こしやすいというのが、人類の歴史的経験です。

ここには、人類にとって都合のよい財貨やサービスの産出量だけを測定し、不都合な「反生産物」は無視してきた、「経済学」という「科学」の今日に至る根本問題もあります。「生産」の「統計」はとられますが、公害や環境破壊や、原材料などの生産にあたる世界各地の労働者の窮迫など、「反生産」に関する統計はとられませんでした。

ところで、われわれの属する「近代世界」とは違うシステムは、「成長パラノイア」から自由であったと思われれます。「開国」という名の「近代世界」への組み込みを経験するまえ、江戸時代の日本人は、いまほど「成長」にこだわっていたとは思えません。そこには、人間の別の生きざま、別の価値観があったと思います。

こうした問題を、広く、長期的に検討するには、歴史学の手法が不可欠ですが、伝統的な歴史学は、このような要請にまったく応えることができません。少ない紙幅では、意を尽くしませんが、世界システム論をベースとして、このような課題に応えられる新しい学の領域がつかれば、というのが、私の希望です。

* 今号以降、新たに副所長に就任された先生方よりそれぞれ寄稿いただく予定です。

6月16日(火)に第65回理事会・第58回評議員会を開催し、2008年度(平成20年度)事業報告及び収支決算が承認され、理事・監事及び評議員の選任が行われました。内容は下記のとおりです。

1. 2008年度事業報告及び収支決算の承認

(1) 研究事業

2008年度の研究事業では、21件の研究プロジェクト、4件の国際フォーラム、3回の公開講演会及び2分野のスペシャリスト養成事業等を実施しました。

(2) 収支決算

決算については、当初予算より1,900万円の諸経費削減に努め、外部からの資金の導入に努めたものの、下記のとおりとなりました。

総収入合計	12,848万円
総支出合計	17,436万円
当期収支差額	▲ 4,588万円

収支差額については、「研究事業推進基金」を取崩してこれに充当しました。

なお、外部から資金の受け入れは次のとおりです。

① 文部科学省科学研究費補助金「特定奨励費」	3,900万円
② (財) 新技術振興渡辺記念会「科学技術調査研究助成」	160万円

2. 理事・監事及び評議員の選任

前回理事会・評議員会以降、関係諸団体等の役員交代に伴う理事3名、監事1名、評議員2名の辞任があり、理事・監事及び評議員の選任が行われました。

(退任)	理 事	中村 昇	京セラ(株)相談役
	理 事	渡部 隆夫	(社)京都経済同友会全代表幹事
	理 事	辻井 昭雄	関西経営者協会前会長
	監 事	永易 克典	(社)大阪銀行協会前会長
	評議員	安藤 力	住友金属工業(株)前副社長
	評議員	安西祐一郎	(学)慶応義塾前塾長

(新任)	理 事	川村 誠	京セラ(株)会長
	理 事	北尾 哲郎	(社)京都経済同友会代表幹事
	監 事	岩田 直樹	(社)大阪銀行協会会長
	評議員	小塚修一郎	住友金属工業(株)副社長
	評議員	清家 篤	(学)慶応義塾塾長
	評議員	玉越 良介	(株)三菱UFJフィナンシャルグループ会長

なお、退任日は2009年6月30日。就任日は2009年7月1日。任期は前任者の残任期間である2010年3月31日までです。



理事会・評議員会



理事会当日 左から、志村学術参与(副所長待遇)、尾池所長、立石理事長、川北副所長、田中副所長

2009年度の高等研研究プロジェクトのテーマは研究対象で6区分に分類し、前年度からの継続プロジェクトも含めて21テーマの研究プロジェクトを推進しています。

そのうち、主に3年次以降のプロジェクトについて研究代表者から、研究プロジェクトの活動状況を寄稿いただきましたので順次紹介していきます。

区分B. 文化と社会

「女性研究者と科学技術の未来」

(2007～2009年度・3年次)

研究代表者：伊藤 厚子

高等研フェロー・お茶の水女子大学名誉教授/理化学研究所研究嘱託



国際的に見て、日本には女性の研究者が極めて少ない現状がある。少々気負った研究題目ではあるが、女性の自然科学分野への進出を促進することによって、日本における科学技術の進展が加速されるとともに新しい展開があるに違いない！そんな近未来を実現する方策を議論する目的で研究会を企画した。

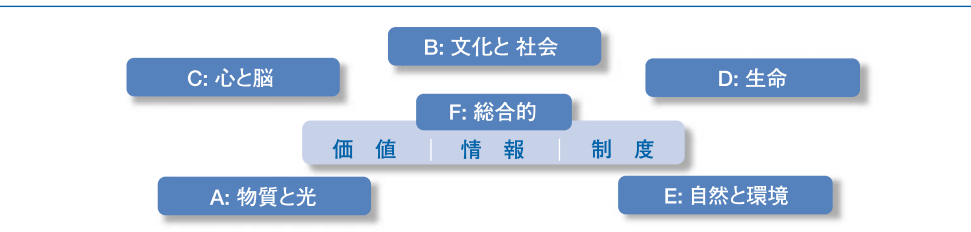
まずは、いまだ大量に埋蔵されている女性の潜在力を掘り起こし、科学の担い手へと育成しなくてはならない。言うは易いが、実現には仕掛けと努力が必要である。研究会では、女性の人材育成に焦点を合わせつつ、そのためには女性に限らず、科学を志向する次世代の層を厚くすること、さらには、国民一般の“科学する心”を涵養することが重要であるとの共通認識の下で、議論を行っている。

参加研究者は毎年度約20名。今年度は22名で、そのうち8名が男性である。男性の比率は、広い意味での表題関連の集まりとしては、際立って高く、また、米国での教授層が長い2名の参加もあり、議論の広がりにも反映されていると感じている。参加研究者の大多数が大学教員の経歴をもつが、研究所・企業・科学博物館・初等中等教育学校からの参加も得ている。また、毎回、参加研究者以外から話題提供を2～4名に依頼して、広い視点から検討することを心がけている。

これまでに採り上げた議題は多岐に亘っており、大まかな分類で、以下に例を挙げる：大学生を対象とした進路選択に関する調査；初等中等教育における理科教育；理科好きな子どもを育てるためのNPOなどの活動；男性と女性の脳の発達過程；思考の性差；遺伝と環境、免疫のしくみなど。

また直近の問題としては、女性の研究者が抱えている諸問題；第3期科学技術基本計画；文部科学省・日本学術振興会・科学技術振興機構による女性の研究者支援策などを挙げる事ができる。取り上げた課題の詳細はホームページに掲載されている。

研究会でなされた議論は公表したいと考えており、毎回詳細な記録を作成して、公表に備えている。講演の内容は講演者執筆による要旨を原則とし、質疑応答は参加研究者である岩村さんと記録補佐（若干名の交替）のメモをもとに岩村さんが原案を作成し、参加者が加筆修正した後に、参加者全員の承認を得て記録を完成させている。研究会記録のほかに、大学学部、大学院（修士、博士）の卒業生に、小規模ではあるが、詳細なアンケート調査を行った。結果を印刷公表する予定である。



区分D. 生命

細胞履歴に基づく植物の形態形成

(2007～2009年度・3年次)

研究代表者：鎌田 博

高等研企画委員・筑波大学大学院生命環境科学研究科教授



人間を含む高等動物は、過去の経験を脳の中に記憶としてとどめ、その記憶を使いながらそれぞれの時点でさまざまな事態に適切に対応する仕組みを持っている。一方、植物、下等動物、単細胞生物等は脳を持っていないが、各々の生物個体（細胞）が過去に経験したことやそれまでに辿ってきた発生過程を記憶していることが知られている。

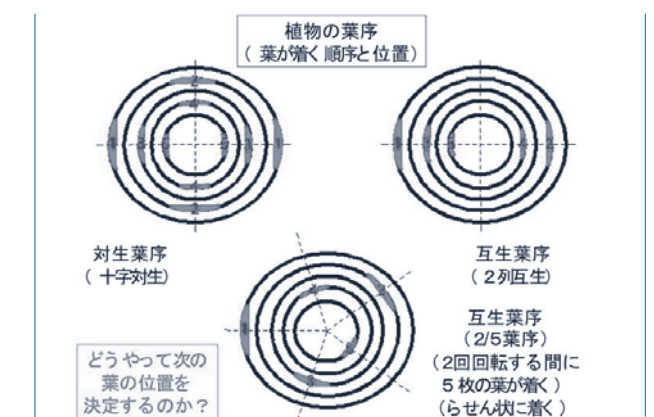
例えば、春に花を咲かせる植物の多くは冬の低温に一定以上の期間さらされることで花を着けたり開花できるようになる。この場合、秋になって寒くなった時点で急に暖かい日が1日だけあると花を咲かせてしまう事例（狂い咲き）もあるが、多くの植物はたった1日だけの暖かい日は無視して、寒い日が何日も続いた後に暖かい日が来ることによって花を着けたり開花したりする。

このことは、単に寒さや暖かさに反応しているのではなく、寒い日や暖かい日が何回ぐらい続いたかを記憶していると考えたと説明がつく。また、葉が着く位置を見てみると、植物によって180度ずつずらして着けるもの、90度ずつずらすもの、一定の角度を持って順次葉を着けるものなどさまざまである（図参照）。

この場合、前の葉からの位置を認識して適切な位置にある細胞が次の葉へと成長していくものと考えられる。このように、植物においても、個体あるいは細胞として過去の経験や発生過程を記憶したり、離れた位置にある細胞が互いの位置を認

識したりする仕組みを持っていると考えられるが、その仕組みについてはほとんど解明されていない。

そこで、本プロジェクトでは、このような現象を細胞履歴（個々の細胞が過去の経験・発生過程や細胞同士の位置を認識して記憶すること等）と名付け、その仕組みについて、動物における事例を含め、先駆的な研究成果を研究班員や招へい研究者に紹介してもらいながら、参加者全員で議論し、生物学上の新しい考え方や概念の構築を目指している。この活動を通じて、各々の細胞内にある染色体の構造変化や特定の蛋白質間相互作用等が細胞履歴に関わっていることが明らかになりつつある。



今号より、高等研において自らの研究や研究者との交流を目的として招聘している「高等研フェロー」の研究活動をご紹介します。

「地学振興を目指して」 竹本 修三 高等研フェロー・京都大学名誉教授・国際測地学協会 (IAG) Fellow

今年4月からフェローとしてお世話になっております竹本と申します。よろしくお願いたします。現在私は、尾池和夫所長を代表者とする国際高等研究所の研究プロジェクト「天地人—三才の世界：宇宙・地球と人の関わり合いの新しいイテラシーの創造」の内部メンバーとして、研究会の日程調整などの細かい作業のお手伝いをさせていただいております。このほか、本年度に「京大地球物理学研究の百年」および「大学法人化のもとでの地学教育の現状と将来」という2つのフェロー研究会を企画しました。

このうちの最初の方は、志田 順 先生が1909年に京大に赴任され、京都で地球物理学の研究を始められてから今年がちょうど百周年にあたりますので、これを機会に京都大学における地球物理学研究の百年間の歴史を振り返るとともに、この分野の将来の研究発展の方向性を探ろうというのが主旨であります。この研究会は6月27日に開催され、火山、気象、高圧実験—地球内部物性、地球電磁気などのテーマの講演がありましたが、40名の参加者を得て、活発な議論が取り交わされました。当日の参加者のなかから、この研究会は1回で終わるのではなく、継続して開催してほしいという声が多く出ましたので、第2回以降の研究会の開催を検討してみたいと考えております。

もう1つの研究会は、昨今の厳しい社会情勢のなかで、地学振興をどうやって図るかというものです。数年前から若者の理科離れが問題視されておりますが、理科のなかでも地学はマイナーであり、先細りが懸念されています。地学は、地球の起源や生物の進化など、子ども達がもつ根源的な問いに答え、宇宙の姿やその成り立ちなどのように子ども達の夢を育む内容を豊富に含む科目であるにもかかわらず、地学を開講している高校は、2004年度の文部科学省の全国調査で全体の約3割にしか過ぎません。

また、大学法人化がすすんで、宇宙や天文、地質などのコースを設ける大学も少なくなってきました。これは、天文観測などの大規模施設の整備や、野外における地質調査には、高額の予算が必要なことなどが原因であるといわれています。そこで、大学入試センターの「地学」の出題に関与した経験を共有し、同じ問題意識をもつ10名のメンバーに8月末に国際高等研究所に集まっていただいて、大学法人化後の改組が地学分野の研究と教育にどのような影響を及ぼしたかの現状分析をするとともに、われわれのできる改革の方向性を見つけ出したいと考えております。

最後になりましたが、私は現在、国際高等研の研究室を大体週2日のペースで使わせていただいておりますが、何者にも煩わされない静かな環境のなかで、資料の解読が随分はかどりました。ときには窓の外を雉の夫婦がのんびり歩いたりするのを見かけて、ほっとしております。



研究個室にて

- ・略歴：1942年生 1996年/京都大学大学院理学研究科教授
2006年/定年退職・京都大学名誉教授
2009年/国際高等研究所フェロー
- ・専門研究テーマ：固体地球物理学・測地学（特に地殻変動、地球潮汐、重力など）
- ・主な役職/国内：日本学術会議測地学研究連絡委員会委員長（1997年～2003年）
日本測地学会会長（2003年～2007年）
地震予知連絡会委員（2004～2006年）
日本地球惑星科学連合評議員（2005年～2007年）など
- /国際：国際測地学協会 (IAG) 特別研究班 座長（1991年～1995年）
国際測地学協会 (IAG) 第V委員会（地球潮汐委員会）委員長（1999年～2003年）など

参加者募集

高等研公開講演会「こころをつなぐコミュニケーション～ことばと表情の認知科学～」10月24日

10月24日(土)、京都銀行協賛による2009年度第2回目の公開講演会を開催致します。講師に、京都大学こころの未来研究センターの吉川左紀子センター長をお迎えし、「聞き手の役割」を科学的に解明する実証研究より得られた成果を基に、「こころをつなぐ」対話についてお話いただきます。

多くの皆様のご参加をお待ちしています。

●開催概要

- 演 題: こころをつなぐコミュニケーション ～ことばと表情の認知科学～
 講 師: 吉川左紀子氏・京都大学こころの未来研究センター教授(センター長)
 開催日時: 10月24日(土) 14:00～16:00
 場 所: 高等研レクチャーホール
 対 象: 高校生以上
 定 員: 150名
 参 加: 聴講無料・事前申込不要



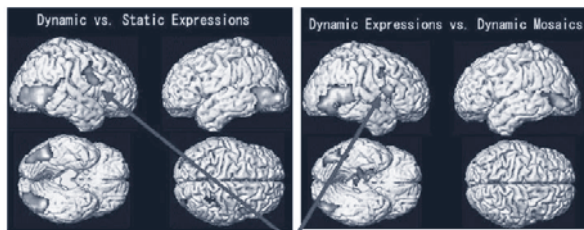
吉川左紀子氏

●講演要旨(公開講演会案内チラシより抜粋)

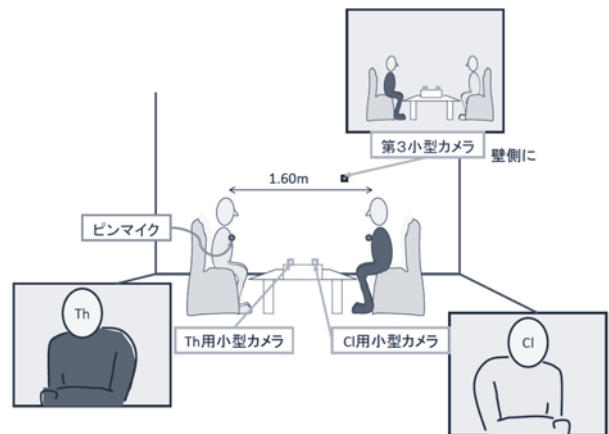
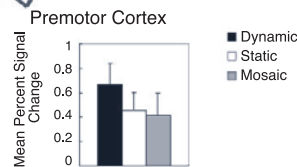
ことばや表情を通して、人と人は多くの情報をやりとりし、お互いの気持ちを伝え合うことができます。最近の認知科学・脳科学研究から、人には恐怖や怒りの表情を敏感に察知する仕組みがあることや、笑顔と信頼感の間に密接な関係があることなどが分かってきました。コミュニケーションにおける表情の機能とは何なのか、携帯電話やメールでは発揮することのできない、「こころの動きを表す表情とそれを感知するこころのはたらき」の重要性についてお話します。

もうひとつの話題は「対話」です。対話には、単に情報のやりとりだけでなく、問題解決を促したり、新しい発想をもたらす「発見的な機能」があります。

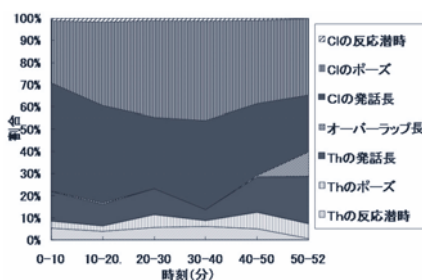
こころの未来研究センターでは、熟練のカウンセラーと共同で、カウンセリング対話を題材にした実証研究を行っており、対話における「聞き手の役割」を科学的に解明しようとしています。そうした成果を手掛かりにして、こころをつなぐコミュニケーションについて、お話したいと思います。



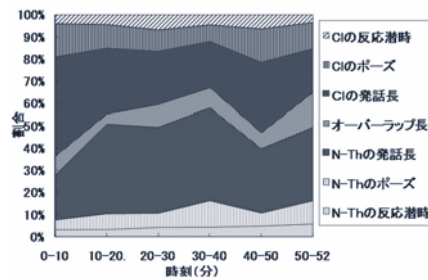
恐怖表情知覚時の脳活動(動画条件と統制条件の差分)
右図は前頭前野の活動を示している



聞き手が専門家ときの発話と沈黙の変化パターン



聞き手が非専門家ときの発話と沈黙の変化パターン



2002年4月から2005年3月まで実施した研究プロジェクト「思考の脳内メカニズムに関する総合的検討」（研究代表者・波多野 誼余夫）の研究成果として、高等研報告書0803「思考の脳内メカニズム」を7月に刊行いたしました。

この報告書取りまとめ中の2006年1月13日に波多野 誼余夫先生が急逝されました。高等研事務局の対応遅れなど諸般の事情により報告書の取りまとめが中断していましたが、岡田益吉先生（前高等研副所長）に取りまとめを引き受けていただき、このほど刊行することができました。

この報告書は、「概観」（波多野誼余夫先生）と13章（執筆者18名）からなる論文に加えて、岡田益吉先生にご執筆いただいた「まえがき」で構成されています。

以下、本書の「まえがき」（前高等研副所長 岡田益吉）の抜粋文を転載します。

……20世紀末葉に始まった科学技術の飛躍的發展と脳の生物学の深化は人々にアタック再開の希望を与えた。ヒトの知性の中核をなすものと考えられる「思考」のうち、脳の働きに属する面を、神経科学、脳科学、認知科学、心理学、生理学、言語学、哲学、情報科学、情報工学など諸分野の研究者が集い、既成の学問の枠を超えて議論し、ヒトの知性と心の理解を含む課題への接近を通して、脳の働きの確かな理解へ向かう道をつけることを目指す国際高等研究所の研究プロジェクトとして設定されたのが、波多野誼余夫国際高等研究所特別委員・放送大学教授を研究代表者とする「思考の脳内メカニズムに関する総合的検討」である。

21世紀初頭、2002年度より2004年度まで実施されたこの研究活動においては、基幹メンバーに加えて、本課題に関する第一線の研究者を国内外から招いて徹底した議論が行われ、その成果は大冊の論集として出版される予定であった。ところが、研究代表者の波多野誼余夫教授が急逝されるという思いもかけない非常事態が出来て、この出版は事実上不可能となった。しかしながら、幸いにして波多野教授は国際高等研究所に宛てた本研究プロジェクトの報告書を8割方完成しておられた。そこで、国際高等研究所は、この報告書を完成出版することが波多野誼余夫先生のご遺志を受け継ぐことになると考えて提案し、基幹メンバー各位の快諾と協力を得て完成したのが本書である。

分担執筆者とその論文タイトルは波多野先生が決定され、依頼済みであった。論文原稿は各執筆者が完成原稿として提出されたものに、編集作業では全く手を加えていない。ただし、当初の計画では巻頭に波多野先生が「概観」を執筆されることになっていたが、残念ながらこの原稿は完成を見ていない。そこで「概観」に代えて、2002年度、研究プロジェクト発足に際して研究代表者として研究の狙いを述べられた「思考のメカニズム」と題する講演の概要を掲載することとした。これは波多野先生が自ら作られ、講演に際してメンバーに配布されたものである。この文書をデジタル化し、ファイルとして保存され、提供して下さった基幹メンバーの一人である乾敏郎京都大学教授に感謝申し上げる。

研究開始以来すでに数年以上を経過しており、波多野先生がご健在であればこの分野の最近の進展より将来を見据えた概観を書かれたことであろう。それ故、この講演概要は完全に概観に代わるものとはなり得ないことは明白である。しかし、取り得る手段は限られておりやむを得ないことである。また、夙に原稿を完成された分担執筆者が、進歩の速い当該分野ではすでに発表時機を失した論文となることを懸念されるのは当然であるが、これについても方針決定には時間が必要であった事情をご賢察の上、御寛容をお願いしたい。



●高等研報告書0803「思考の脳内メカニズム」

- ・研究代表者/波多野 誼余夫
 - ・研究年度/2002～2005年度（但し2005年度は報告書取りまとめのためのフォローアップ研究年）
 - ・サイズ/B5版
 - ・頁数/本文234頁
 - ・価格/1,800円（税別）
 - ・ISBN978-4-906671-57-1
- 本書にご関心のお持ちの方々には是非一読お薦めします。
 なお、本書のお申し込みはコピーマート研究所
 （TEL/075-315-9923・FAX/075-315-9368）まで。



石原 照也

東北大学大学院理学研究科教授

本年度は、招へい研究者 (IIAS Researcher)* として、石原照也 東北大学大学院理学研究科教授を招へいしました。

専門は光物性で、固体と光の相互作用に関する実験的研究、最近では特にフォトニック結晶やメタマテリアルなど人工構造の光物理に取組んでおられます。

石原先生は、高等研の本年度からの新規研究プロジェクト「メタマテリアルの開発と応用 (2009～2011年度)」の研究代表者であると同時に、同名の日本学術振興会先導的研究開発委員会の委員長も務められ、双方が連携して目的に相応しい研究会を組織して活動されています。

* 高等研では、各分野で中核として研究を推進している研究者を、高等研において自らの研究を進めるとともに、国内外の研究者との研究交流を通じて、高等研の研究活動を推進していただくために招へいしているものです。

日時	来訪者/団体	人数	目的
7/17 (金)	近畿日本鉄道 (株) 大学卒新入社員	31名	けいはんな学研都市の事業展開、開発状況等の学習
7/18 (土)	京都大学環境保全センター 浅川美鈴助教他	4名	修景池の水質保全に係る調査
7/30 (木)	大阪府立大学大学院生命環境科学研究科院生、 京都府立大学大学院生、帝塚山大学学部生	15名	けいはんな学研都市視察の一環

●水質保全の調査 (2009/7/18)



高等研の修景池は、従来は殺風景で余り評判がよくありませんでしたが、研究環境向上策の一環として、視覚的に池を楽しめるように、水生植物の中から「ハス (蓮、学名: *Nelumbo nucifera*、英名: Lotus)」を選び、5月頃に地下茎を植え付けた10鉢を玄関付近の池に並べて置いてみました。その後順調に成長して6月下旬頃からはつぼみをつけ始め、7月頃から心が癒されるような薄紅色の大輪を咲かせました。お盆の頃まで、今までとは趣の異なる穏やかな池の表情を見せてくれ、研究者など来訪者からも好評でした。来年は鉢の数を増やすことなどを試みようと考えています。



(2009/6/13)



(2009/7/7)



(2009/7/14)



(2009/7/24)



(2009/7/28)

●研究活動(8月1日～10月31日)

■開催予定日	■研究プロジェクトのタイトル	■研究代表者
8月22日(土)	ナノ物質量子相の科学(幹事会).....	金森順次郎
8月26日(水)	ものづくりにおける実践知を体得した人材の育成と継承に関する調査研究.....	岩田 一明
8月28日(金)～29日(土)	女性研究者と科学技術の未来.....	伊藤 厚子
8月28日(金)～29日(土)	フェロー研究会「大学法人化のもとでの地学教育の現状と将来」.....	竹本 修三
8月29日(土)	フェロー研究会「国際ビジネス法務研究会」.....	松岡 博
9月1日(火)～2日(水)	天地人—三才の世界:宇宙・地球と人間の関わり合いの新しいリテラシーの創造.....	尾池 和夫
9月2日(水)～3日(木)	数量的アプローチによる日本経済の比較的研究.....	宮本 又郎
9月4日(金)～5日(土)	ナノ物質量子相の科学.....	金森順次郎
9月5日(土)～11日(金)	すきまの組織化(ワークショップ).....	鳥海 光弘
9月11日(金)～12日(土)	研究成果の取りまとめ会合「19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究」.....	吉田 忠
9月14日(月)～18日(金)	第15回コンピューショナル・マテリアルズ・デザイン(CMD)ワークショップ(於:大阪大学).....	赤井 久純
9月18日(金)～19日(土)	21世紀における文化としての設計科学と生産科学.....	岩田 一明
10月2日(金)～3日(土)	エネルギー科学における多階層連結コンピューティング.....	三間 園興
10月16日(金)～17日(土)	2009年度第2回企画委員会.....	尾池 和夫
10月23日(金)～24日(土)	18世紀における世界観の多次元的交錯.....	石川 文康
10月23日(金)～24日(土)	近代精神と古典解釈:伝統の崩壊と再創造.....	手島 勲矢
10月23日(金)～24日(土)	グローバリゼーションと市民社会.....	仁科 一彦
10月29日(木)～30日(金)	文化財保全技術(国際シンポジウム).....	志水 隆一
10月30日(金)～31日(土)	メタマテリアルの開発と応用.....	石原 照也
10月31日(土)	細胞履歴に基づく植物の形態形成.....	鎌田 博

●公開講演会の開催

■開催日	■講演テーマ	■講師
10月24日(土)	公開講演会「こころをつなぐコミュニケーション～ことばと表情の認知科学～」	吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター センター長



お・知・ら・せ

事務局の組織変更(7月1日)

7月1日付けで、高等研事務局の組織名称を一部変更するとともに、担当部長が交代しました。

新組織	総務部長	牧井 俊明
	研究支援部長	竹島 康志
	学術情報部長	須本 隆雄
	経理部長	影浦 秀蔵

編集・発行者

財団法人 国際高等研究所

事務局長 佐藤 行則

〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地

TEL: 0774-73-4000 FAX: 0774-73-4005

http://www.iias.or.jp